

シカが日本の自然を食べつくす!?

シカが増えたことがなぜよくないのか？

シカは、植物を食べる日本の在来種で、全国で分布を拡大し個体数が増加しています。シカが増えるのは良いことと思うかもしれませんが、全国で生態系や農林業に及ぼす被害が深刻な状況となっています。

樹皮を食べられた木々が枯れ、森林が衰退することで、そこをすみかとする多くの動植物に影響を与える例も見られます。森林をはじめとする植生への影響が深刻な地域は、尾瀬や南アルプスなど日本の生物多様性の屋台骨である国立公園にもおよんでいます。



写真：環境省

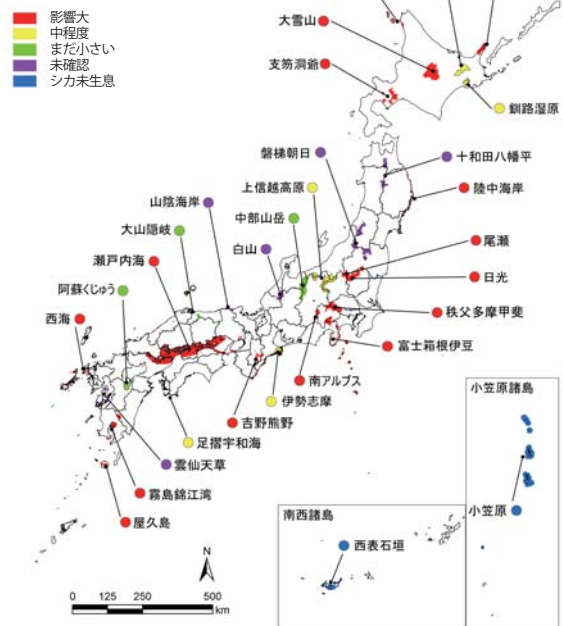
シカの分布拡大状況

- 1978年の分布地域
- 2011年までの分布拡大地域

注) 1978年の自然環境保全基礎調査哺乳類分布調査(環境省生物多様性センター)による生息分布マップと、2003年の同調査と2007年から2011年にかけて報告のあった捕獲位置情報を加えて作図したものです。



国立公園における被害発生状況



【シカによる高山植物への影響】

(南アルプス：長野県・山梨県・静岡県の県境 ※下記写真は、概ね同じ位置から撮影したものです。)

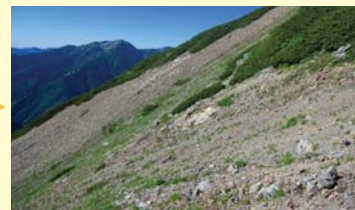


▲昭和54年7月

写真：増沢武弘氏



▲平成17年7月



▲平成22年7月

【その他の被害等の様子】



▲シカによる樹皮剥ぎの状況。樹幹が一周剥がされると木は枯れてしまいます。

写真：環境省



▲シカにより植物がほとんどなくなったと考えられる林内の様子(標高約2,800m)。

なぜシカが増えたのか

シカが増えた要因は、様々なものが関係しているといわれています。

【シカが増えた主な要因】

- 人間が、シカを肉や毛皮として利用する機会が減り、シカの捕獲数が減ったため
- ハンターの高齢化・減少により、シカの捕獲数が減ったため
- 積雪が減り、シカが生息できる範囲が増え、冬を乗り越えられるようになったため
- 放棄された農地が増え、雑草や低木がシカの餌資源として利用されたため 等

シカ被害への様々な取組と鳥獣保護管理

対策の例

植生保護柵の設置

シカが、植物などを食べ荒らすのを防ぐために、シカが侵入できないよう柵やネットを設置しています。



写真：EAC

捕獲による適正な数への誘導

ハンターによる狩猟は、増えすぎたシカなどを適正な数に調整するために役立っています。



写真：北海道立総合研究機構
環境科学研究センター

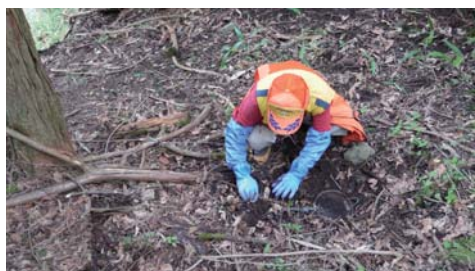
鳥獣保護管理の担い手とは？

人間と野生鳥獣の適切な関係をこれからも続けていくためには、絶滅のおそれのある鳥獣は積極的に保護し、逆に、自然環境や人間生活に被害をもたらすほど数が増えた鳥獣は、その数を抑制する等の対策が必要です。

「鳥獣保護管理」とは、こうした野生鳥獣との適切な関係を維持していくための取組であり、ハンターは、その役割の一部を担っています。

今、求められるハンターの技術

ハンターは、野生鳥獣に対する深い理解と感謝の念を持ち、とらえた獲物を「いただく」ことをとても大切にします。また、ハンターは、狩猟免許試験に合格して狩猟免許を受けており、猟具（銃器、わな、網）の安全で適切な使用に関する知識と技術を持っています。



▲くくりワナの設置の様子。
猟具を適切に扱うには、知識と技術が必要です。



▲エゾシカロースト。
感謝して美味しくいただきます。

減少・高齢化が進むハンター

こうした倫理観、知識、技術を持つハンターが行う狩猟は、野生鳥獣の個体数を適正に維持し、野生鳥獣と人が共存していくために、重要な役割を担っています。一方で、近年、ハンターの減少や高齢化が顕著です。そのため、環境省では、平成24年度から若手ハンターの確保に向けた取組を進めています。

環境省では、シカの食害対策の実施により保全される生物多様性の価値に関するアンケート調査（CVM調査）を実施しました。その結果、シカの生息数の増大や食害への認知度が高いほど、食害対策への協力には積極的（経済的負担に応じる意志が強い）ということが明らかになってきました。

このことから、環境省では、シカの生態系への影響や対策を詳しく周知することが自然の生態系を保つ上で重要と考え、本フォーラムは、その取組のひとつとして、鳥獣保護管理の担い手であるハンターの社会的役割を周知するとともに、新たな鳥獣保護管理の担い手の確保を目的に掲げ、様々な広報活動に取り組んでいます。